
散髪の思い出

立木十八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散髪の思い出

【Nコード】

N2379I

【作者名】

立木十八

【あらすじ】

髪の毛が伸びてくると、嫌な思い出がよみがえる。随分と昔の子供の頃の思い出なのだが、今でも思い出すたびに、背筋が凍り冷や汗が出てくるのだ。その思い出とは……。

髪の毛が伸びてくると必ず思い出す、嫌なことがある。もう何十年も昔の、子供の頃の思い出なのだが、よほど強烈な印象が残っているのだろう。「そろそろ頭切ったら？」などと妻に言われると、背筋がぞつとして冷や汗が出てしまうくらいである。

そのたびに私は、適当なハサミを使って、自分で切りそろえることにしている。切りすぎないコツは、少しずつ慎重に切っていくことだ。私は、もうずっとこの調子で、自分の髪の毛は自分で切っている。

実家に住んでいた頃は、まだ母親に切ってもらっていたのだが、地方の大学へと進学し、家を出てからは、ずっと自分で切っている。結婚してから、一度だけ妻に切ってもらったことがあったが、あまりにもひどい髪型にされたので、それ以来頼んだことはない。

とは言っても、自分の腕前が特別優れているわけではない。自分で切る髪型は、いつも同じざんぎり頭で、別段それが気に入っているわけでもない。それでも私が自分で髪の毛を切り続けているのは、ちよつとしたわけがあるのだ。

私が子供の頃は、散髪なんて近所の床屋でやってもらうのが普通だった。髪型の種類は、そんなに選べるわけではない。自然、周りの子供達はみんな、だいたい似通った髪型だった。近所には何軒か床屋があったが、そのどれに行っても、子供にとっては変わりはない。だから、読みたい漫画や雑誌のそろっている床屋に行くのが常だった。

そんな近所の床屋の中に「バーバー」という理髪店があった。大通りには面していない、狭い裏通りにひっそりとあり、店構えは古くさく、軒先に並べられたアロエやなんかの鉢植えが伸び放題になっていて、通行人には少しばかり邪魔になっていた。小さく狭い

店内には、くたびれた感じのオヤジがひとりいて、いつでもぼうつと、うつろな表情をして、店内から通りを眺めていた。

噂では、そのオヤジには奥さんがいたそうなのだが、なにが原因なのか逃げられてしまい、ひとり店を切り盛りしていたらしい。切っているところも盛っているところも見ただことはなかったが。

なにしろ、いつ店の前を通りかかっても、客が入っているところなど見たことはなく、オヤジがひとりでぼうつと外を眺めているだけなのだから、気味が悪い。自然と、よくない噂がたった。

奥さんに逃げられたのが、よほどの痛手だったのだろう、頭が少しおかしくなってしまった、というのだ。一度ついた火が勝手に燃え広がるように、噂はさらなる噂を呼び、ひとり歩きをし始めた。

居眠りしていた客の耳を切り落とした。パーマ液の量を間違えて客の髪の毛が全部抜けた。あんまり暇なので野良猫をさらってきてバリカンで毛を刈っている。その猫をしまいには殺してしまう。その死体を飼っている犬に食わせている。この辺りで野良猫を見なくなったのはそのせいだ。そのうち猫は子供にすり替わり、具体的な名前までが付けられた。それはこの前引っ越ししてしまった長谷川さん家のつとむくんであったり、家出したまま帰ってこない田中さん家のさっちゃんであったりしたのだが、それまでの漠然とした噂話に具体的な名前が付けられたことによって、子供にとっての信憑性の度合いは格段に増した。

いつしか子供達の間では、バーバーの噂は定番の怪談となり、店の前を通ったり、中に入ったりするのは一種の肝試しになっていた。そんな状況を、当のオヤジがどう思っていたのかは分からない。噂話のせいだけではないだろうが、いつそう客の途絶えた店内で、やはりオヤジはぼうつと外を眺め続けていた。

ある日のことだ。確か小学校の卒業アルバムにのせるための写真を撮る、その前日のことだったように記憶している。伸びるにまかせた私の頭を見るに見かねた母親が千円をくれて、言った。

「明日、写真撮るんでしょ。みつともないからこれで切つてらっしやい」

私は少しもみつともないと思っていなかったのだが、母親の命令は絶対である。なにより、差額は全部こずかいにしていというのだから断る理由もない。私は喜んで髪の毛を切りに出かけた。

当時の子供にとっては百円でも大金である。どれだけ差額を懐に入れられるか、私の頭脳はそのためだけに全速力で回転しはじめた。近所の床屋で一番安くやってくれるのはどこだろうか、と。

しかし何軒かを比較検討してみたが、差はなかった。床屋組合の協定でもあるのか、金額はどの店も同じで、こどもは八百円だった。結局のところ二百円のこずかいで満足するしかないのかと諦めかけた、その時だ。

もう一軒、床屋があるのを思い出した。気味が悪いので避けて通っていたが、店の前に立てかけられた看板には金額表があったはずだ。私は、一応確かめてみよう、と、バーバー に向かった。

目印となるはずの、赤と青の回転灯は掃除をしていないせいか、少しも明るさが感じられない。かろうじて回っているのが分かる、そんな程度だった。

店内は夕暮れの薄暗さを、抵抗もせずに受け容れていた。古ぼけた蛍光灯の光が力無く明滅する様を見て、私はさすがに躊躇した。だが、看板を見るだけなのだからと自分に言い聞かせ、おそろおそろ近づき、目をこらして料金表を確認した。

「こども五百円」と手書きの文字で書かれている看板を見て、私は大いに迷った。

怪談話などは、はなから信じていなかったが、なにしろ現物が目の前にあるのだ。まさか、とは思うが、もしや、とも思うのである。今までは一笑に付していた噂話が次々と頭をよぎった。

思索していたのが、どれほどの時間だったかは分からないが、私にとってそれがやけに長く感じられたのは確かだ。握りしめた千円札は、汗を吸ってすっかりしおれていた。

そしてついに私は、五百円という安価の誘惑には勝てず、おずおずとバーバーの扉を開けたのだった。

さて、そこで私がどんな恐ろしい目に遭ったのだろうかと期待した人には申し訳ないのだが、散髪は何事もなく終わってしまつた。オヤジは相変わらず無表情で無口で不気味であつたが、腕前は決して悪くなく、異常なほど緊張していた私の心配をよそに、意外なほど短い時間で散髪は終了した。オヤジの差し出す鏡で、まず私が確認したのは、ちゃんと耳がついているかどうかだつた。もちろん耳はついていた。両方とも。

私はおつりの五百円を受け取り、さつさと店を出た。オヤジの「まいど」という小さな声を背中で聞き、人は見かけによらないものだと思つたのを憶えている。

外はすでに暗くなつており、夜の風が切りそろえたばかりの髪をなでた。首筋に寒気を感じ、くしゃみが出たので、私は、風邪をひいてはかなわん、と小走りに家路を急いだ。五百円を握しめた私は、少し誇らしい気持ちさえ感じていた。

そんなことがあつてから一年後ぐらいだろうか。私の住む町内で大がかりな道路工事があつた。なんの工事だつたのかは分からないが、きつと年末になるとよくやつている例のアレだつたのだろう。私の家の前も、バーバーの前の通りも工事が始まり、ひっきりなしに重機の作業する音が響いた。狭い道を大型のトラックが何台も通り、時にはとまっている自転車をなぎ倒したりもした。そしてバーバーの店前に並べられた植木鉢も。

ここから先は、人づてに聞いた話なので、真偽のほどは定かでない。

壊れた植木鉢の中からは、白いビニール袋に入った、なにかが出てきた。オヤジはそれを怒りも慌てもせずに、ただぼうつと眺めていた。トラックの運転手が謝ろうと降りて、植木鉢の破片を片付けた時だ。ビニール袋の破れ目から、白い破片のとびだしているのが

見えた。それは骨のようだった。

そうした話の真偽はともかくとして、オヤジが警察に連れていかれ、店が閉鎖されたのは事実だった。やけに近くを通るパトカーのサイレンを、私は自宅で聞いたし、その後、テープで囲われた店の前を通ったのも憶えている。

今度は、つくり話ではない噂が、町内だけではなく広い地域を駆けめぐった。

店主のオヤジは以前から不仲だった奥さんを口論の末にカツとなり誤って殺してしまったのだそうだ。そして死体をばらばらに刻んだ。そのばらばらにした肉片をどうしたかは想像にお任せする。オヤジは犬を飼っていなかった。そうして残った骨を、植木鉢に埋めて隠していたというわけだ。

こんな話があつてからというもの、私は床屋で髪の毛を切ることができなくなってしまった。そして髪の毛が伸びてくるたびに、あのオヤジのうつろな表情を思い出してしまい、首筋に悪寒を感じて震えがくるのである。

しかしだ、どうしても理解できないことがある。なぜオヤジは遺骨を埋めた植木鉢を店の前に、あんな風に放置しておいたのだろうか。異常な精神状態だった、と言われればそれまでだろう。だが、私は、そんなそれまでのことが妙に気にかかつてしまうのだ。

なぜ、と問われても理由は分からない。ただ、妻が最近になって急に植木鉢を何個も購入してきた、そのせいかも知れない。妻に聞いてみると、ガーデニングを始めるのだそうだ。なんでも近所の奥さん連中の間で流行っているのだとか。

しかし器ばかりで、肝心の中身を買ってくる様子がない。これから何を植えようかと考えているのだ、と言っていたが、その後は放りっぱなしで手を着ける気配もない。ようやくなにか買ってきかと思ったら、ノコギリだの鉋だのと、ガーデニングには縁のなさそうなものばかりだった。

夕食後に、妻から冷蔵庫を買い換えたいとせがまれた。近頃の冷蔵庫は格段の進化を遂げていて、色々な便利な機能がついているのだそう。夜間は消費電力をおさえ家計を助けてくれるものとか。炊きたてのご飯の味を落とすことなく冷凍できるものとか。野菜をしなびさせることなく保存できるものとか。冷凍した肉を指定した時間に解凍しておいてくれるものとか。

食卓に広げられた様々なカタログを見ているうちに、前髪が目にかかった。私が髪をかき上げる様を見て妻が言った。

「あなた、そろそろ頭切ったら？ よかったら切ってあげましょうか？」

さて、どうしたものだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2379i/>

散髪の思い出

2010年10月8日15時06分発行